2014 新年に向けて 百万母力は一母力から

お母さん業界新聞編集長　藤本裕子

新聞をつくりはじめて、まもなく25年、4半世紀になる。ダイエットも英会話も、ウォーキングも三日坊主の私が、よく今日まで続けられた。これこそ奇跡。文章を書くのが好きなわけでもなく、編集者を夢見たわけでもなく、何かを主張したかったわけでもなく、何が楽しくて今日まで新聞をつくってきたのか…。

お金がたくさんもらえるわけでもない。いや、もらえたはずなのに、もらえる新聞にしなかった。志の高い新聞を目指すわけではないが、ただ、気持ち悪いものは書きたくなかった。つくった人しかわからないが、新聞はずっと残る。

そう思うとだんだん、自分の価値判断の基準が変わってきた。新聞を見れば、自分がわかる。かっこつけている自分、ずるい自分、情けない自分…。昔の新聞を見ると、恥ずかしくて目を伏せたくなる。が、そんな自分を顧みることができるのも、新聞づくり。

いくつもの夏が過ぎ、冬を越し、出会えたのが、「お母さんの心」。目に見えないし、カタチはないが、なんだかいい匂いがする。今にも消えそうな「お母さんの心」に火を灯したい。だったらとことん「お母さんの心」にこだわった新聞をつくりたい。世界に一つくらい、「お母さんの心」に偏った新聞があってもいいかもしれない。

子育てとは？　お母さんって何？…。これでもかこれでもかと難問奇問が出される子育て期。母親たちは悩み、苦しみ、時に潰されそうになる。

私も同じ。子育てもろくにせず、新聞づくりにかまけていると、もれなく子どもからしっぺ返しが来る。寿命が縮まる思いを何度も味わいながら、たわいない日常がどれほど素晴らしいかを自覚する。が、3日もすると、また自分のライトポジション（定位置）へ還る。わが子はそんな母を見ながら、時に反発しながらも、次第に、それがお母さんなんだとあきらめる。

ライトポジション…。何があっても、自分がきちんと収まり、落ち着くところ。そして、その場所こそ、わが子が人生の中で苦しんだり悩んだりしたときに、還ってくるところ。カタチではなく、目に見えないお母さんの基地である。

子育てとは、お母さんが夢を描くこと。そう私は言っているが、それは、自分の人生を歩くという意味。母の歩く道を、子どもたちはのそのそと後ろから歩く。いつまでも、どこまでも、母の後ろをのそのそ歩く。が、いつかある日わが子は、自分の人生の道を見つける。それが、自立の一歩。

私たち母親は、つい自分の道を歩きもせずに、わが子の歩く道を一生懸命につくろうとしてしまう。偉大なる母、小篠綾子さんの名言「子どもはほっといたらええねん」は、まさにそれを意味している。

振り向いたら、わが子は別の道を歩いていた。寂しくも涙しながらも、その日を喜べる母になりたい。私も修行が足りない。もう少しお母さん大学で学ばなければ。

「お母さん業界新聞地域版」をつくっているお母さんが全国にいる。しかも私の故郷である九州で30紙近くも誕生していることが、何よりうれしい。「地域版」を読みながら、私の心は震える。こんなに自由に、こんなに奔放に、これほど開けっぴろげに発信している新聞が、世の中にあるだろうか。

ある講演会で、このお母さんたちの新聞を紹介するとき、「皆さん、この新聞は、おっぱいの匂いがするんですよ。嗅いでみてください」と言うと、みんな新聞を顔に近づけて嗅いでいた。

常識に縛られた人たちから見たら、「こんなの新聞ではない、ただのお母さんの育児日記だ、自己満足新聞ではないか」という声も。いやいやとんでもない。子どもの成長記録の中に、何気ない子どもとの会話の中に、どれほどのお母さんたちの夢や希望が描かれているか。それを読み取れない社会のほうが問題だ。

中には、産後鬱だった日のこと、わが子が生きるか死ぬかの病気で闘っていることを綴るお母さんもいる。家族のこと、夫のこと…さまざまな人生のドラマがそこにある。

「地域版」が、どれほど未来につながっているか。私には、感謝と感動しか言葉はない。

大変な世の中、未来なき時代。こんなときにお母さんが夢なんて…という人もいる。こんなときこそ、お母さんが夢を描くことが大事。なぜなら、お母さんの夢の先にあるのは、子どもの笑顔だから。

2014年は、日本中にマザージャーナリズムの風を吹かせたい。西から東へ。その風が日本中に広がり、百万母力のウエーブを起こしたい。

私も一母力、そして皆さんも一母力。それをつなげることが、私たちすべての母親の仕事だろう。

今日もどこかのまちで、小さな「お母さん業界新聞」が誕生することを祈って、発信を続けていきたいと思います。今年も、どうぞよろしくお願いいたします。

森の子どもたち⑪ 子どもの遊びは遊びじゃない！

森のわらべ多治見園　園長　浅井智子

2学期の最後に、木工職人の園児のお父さんを招き、木工教室を開きました。そこで年長さんには特別にナイフの使い方も教えてもらいました。

ナイフの危険と便利さを実演しながら学んだ年長児たちは、園からのクリスマスプレゼントにナイフをもらえると聞いて、緊張感も持ちながら、それはそれは楽しみに待っていました。

クリスマス会の当日の様子を園児の親御さんが教えてくださいました。

『クリスマス会後、下の炉のほうで年長のS君とKちゃんが2人少し離れて座り（ナイフのときは危ないから離れてと木工教室で覚えたのかな）、静かにナイフと木に向き合っていました。Kちゃんは鉛筆みたいに先だけとんがるように。S君は木を丸裸に。あの日だけで鉛筆サイズの木を4本くらい丸裸にしましたよ。それから！　年中さんや年少さんがうらやましそうにやっている姿をのぞきに来ていて、危ないから離れて見て！なんて言われていました。年少のKちゃんたちは後ろでじーっと見て、それから木と木を持ってきて、S君の隣りに黙って座り、年長さんと同じようにナイフと木の扱いを真似してシュッシュッってやり始めました。みんな会話はなくて、それはそれは静かに。年少Kちゃんのお母さんに見てもらいたくて思わず呼びに行きました。すごくいいものを見せてもらった気分でした』。

子ども同士のこんなやりとりを「いいものを見せてもらった」と報告してくれたお母さんも素敵だなぁと、私はうれしく思います。

子どもにとって遊びは大人のそれとは異なります。「遊び」は憧れの延長線上にある困難を伴う挑戦であり、自分の命の輝きの証です。

● http://plaza.rakuten.co.jp/morinowarabe/

絵本のある暮らし　子どもとの架け橋のような絵本

中川恵理子

私は本を読まない子どもでした。小学校の読書の時間も嫌いでした。ある日、親戚のおばさんが泊りに来て、寝る前にいとこのお下がりの絵本を読んでくれました。それがなぜだかうれしくて、私はひそかに「絵本を読んであげるお母さんになろう♪」と心に決めました。学生時代、本好きの友人は知識が豊富で一味違っていました。自分の子どもには本好きになってほしいなと思いました。友人が出産祝いにセットの絵本をプレゼントしてくれました。当時の私は文字の多い絵本があまりうれしくなかったのですが、そのシリーズは、のちのち子どもたちに何度も読まれる本になりました。

第一子の息子のときは、本好きになってほしいという下心で読み聞かせをしていたし、知育的な絵本ばかりを選んでいたように思います。幸いご近所さんからお下がりの絵本をいただいたり、近くに図書館分室ができたりして、いろんな絵本に触れられ、息子は恵まれていました。9つ離れて娘が生まれてからは、さらに絵本との出会いの幅が増えました。

いろいろな出会いの中で「絵本」は単なる「本」ではなく、子どもの遊び道具のような、子どもと共通の話題を持つための架け橋のようなものだと感じるようになりました。すっかり絵本の魅力にはまった私は、娘が1歳になる頃から自宅で持ち寄り絵本を読み合いっこする会を開き、入園前まで続けました。娘の幼稚園の頃の夢は「絵本作家になる」ことでした。

現在は子どもの成長とともに絵本から少し離れていますが、娘からは「うちにある絵本は一冊も捨てないで」と宣言されています。それなら子どもたちが図書館でよく借りていた本を、孫のために、買い揃えておこうかと思ったりする今日この頃です。絵本には、子育てを助けてくれる大きな力があると思っています。

365日味噌活日記　Miso Girl

NHK名古屋のニュース番組「ほっとイブニング」放送

テーマは「愛知の醸造文化」。その中の一つとしてミソガールの活動が取り上げられました。まずは西尾市にある「みそぱーく」（株式会社はと屋）へ。鳥山欽示社長に豆味噌についてあれこれインタビュー。その後は新鮮多菜カフェ＆レストランにんじん（にんじんCLUB・名古屋市）へ移動し、味噌仕込みの会を開催。特別ゲストでMISOメンが登場！　MISOメン？今後の活躍をお楽

山梨学院大学で学生を前に

山梨学院大学では、社会を幅広く知るべきと、さまざまなジャンルの講師を招いた特別授業を10年以上も前から行っています。この日のミソガールの題目は「味噌de夢を描いた私」。大学生より少し上の先輩として、伝えられることがあるといいな。

「和食」がユネスコ無形文化遺産へ！

12月6日、農水省でユネスコ登録記念セレモニーが開催され、ミソガールも参加。和食に欠かせない味噌ですが、日本人がその良さを見直し、次世代につないでいかなければならないものだと再認識。「味噌活」の楽しさを、世界中の人に知ってもらいたい。ますます夢が広がります。

ヴィンテージ味噌の秘密を探る！

ミソガールおすすめのコルカリーノ×ヤマイチ味噌コラボ「いにしえ味噌かりんとう」が、観光庁主催「世界にも通用する究極のお土産」応募総数747品目の中から100品にノミネートされました。深い味わいです。

熊本「味噌天神秋季例大祭」へ

全国で唯一つ「味噌の神様」を祀っている熊本市本村神社。その昔、大量に腐ってしまった味噌に、境内の笹の葉を入れたところ美味しい味に蘇ったという言い伝えがある。毎年恒例の秋季例大祭に初参加（熊本県みそ工業協同組合主催）。神事のあとは、熊本特産の麦味噌500袋プレゼントほか、味噌汁や甘酒もふるまわれ、大にぎわい。熊本の甘い麦味噌、おいしい！（ミソガール藤本智子）

※お椀のくまモンに注目！